

城門の屋根のヒミツ

城門の屋根、焼き物のように見えますが実は木製屋根に銅の板を被せた「銅瓦葺」で造られています。

こうなった背景には雪国ならではの悩みがありました。それは…

江戸時代の雪だるま

雪の影響で割れる

築城当時には焼き物の瓦が葺(ふ)かれていたとされますが、焼き物の瓦は雪で破損しやすく、ひと冬ごとに大規模な屋根修繕が必要でした。

「弘前藩庁日記」には、宝暦4(1754)年に城内の建物の屋根を銅瓦葺に順次更新する方針を決めたと記されています。



市立図書館所蔵の古文書「弘前藩庁日記」

現在も屋根の一部や窓底には、江戸時代の銅瓦葺が残っています。



▲南内門窓底の銅瓦葺 (江戸時代中期のものと同定)



▲南内門2階屋根の南面に残る銅瓦葺 (江戸時代後期のものと推定)

青みがかって見えるのは緑青の色だね

銅板の下はこのような木でできています



屋根の色にひと手間

2階屋根の葺き替え作業では、穴があくなどして再利用できない銅板を新しいものに交換しました。

しかし、新しい銅板は光沢のある赤茶色をしており、そのまま使うと屋根の色がまだら模様になってしまいます。

そのため、新しい銅板をあらかじめ薬剤に浸し、化学反応で色を調整してから葺き直すことに。



硫黄と反応させて硫化銅の被膜で表面を覆いました



こうして違和感がない色合いの屋根に復旧することができました。

修理しなかった屋根の色合いとなじんでるね



▲南内門2階屋根東面(上段は銅板葺替後、下段は今回修理しなかった窓底)



▲南内門2階屋根の北西隅(右側手前側が交換した部分)

鯨(しゃち)の修理

追手門・南内門の鯨は屋根と同じく、木彫りの彫刻に銅板を巻き付けて作られています。

南内門の鯨は2つとも良好な状態



銅板をいったんはがして木彫りを部分的に直し、再び銅板を巻いて戻しました

追手門では東側の鯨の腐食が著しく修理不可能だったため、新たに木彫りから作り直しました。



▲追手門・東側の鯨 木彫りの腐食状況

古い鯨と同じく杉材を使って同じ大きさ・形に彫り出したよ



▲杉材に描かれた下絵



古い鯨の木彫り

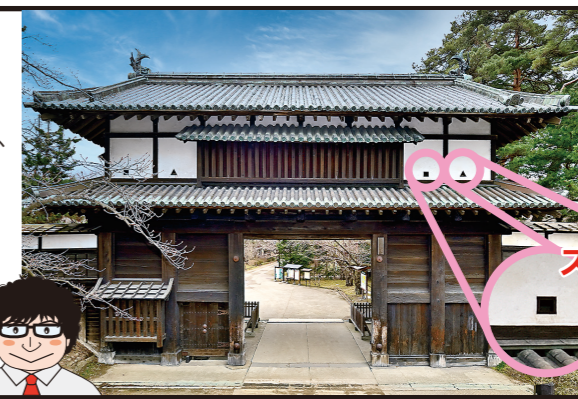


新しい鯨の木彫り

城門の2階には何がある?

2階には物見があります。戦が起こった時に遠くから敵の動きを監視したり、高いところから敵を攻撃したりするためのスペースでした。

弘前城の門のように、門の上に部屋がある形態を櫓門形式といいます



追手門や南内門の2階の壁には、「狭間」と呼ばれる四角形や三角形の穴が複数設けられています。

この穴から鉄砲で敵を攻撃!

物見の内部はこうなっています

追手門2階物見内部

耐震補強用の筋違いが追加されました!



修理前



修理後

はみだし読み物 其の参

鯨って何?



お城やお寺の建物の屋根にのっている鯨。「しゃちほこ」とも呼ばれていますね。虎の頭に魚の体という想像上の海獣です。

鯨がなぜ屋根の上にいるのか、知っていますか?

実は、火除けのまじないなのです。昔の人は、火事になった際に鯨が口から水を出し、火を消してくれると信じていたそうです。

ちなみに 関係ないよ

海にいる「シャチ」とは別の生き物です

